1421号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2023.11.6
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

空き家　29

木幡智恵美

生家の思い出⑯

ようやく見つけた家政婦の仕事。それまでの心労に加え、昼夜なく病人の介護に当たった母の身体は徐々にむしばまれていくことになる。

私に「家に戻れ」と言った父は、郷里で就職したその年、借金返済に奔走した末、失意のうちに亡くなった。残された母子の窮状を見かねて、従兄たちが破産宣告の申し立てをした。その際、銀行の抵当になっていた家を手放すかどうかを問われると、母は言った。「カヨさんから引き継いだ家を、お父さんが潰したなんて言われたくない」。父に苦労させられ続けた母の言葉とは思えなかった。いや、この家の存在がそれほどまでに大きかったのだろうか。どうあれ、母が決めたこと。二人で借金を返し、この家を守らなくてはいけない。

従兄たちのお陰で、銀行以外は支払い能力なしということで返済免除となった。が、職場まで取り立てにやってくる人もいた。相手側としては当然のことだ。ただ、銀行に返す金額だけでも膨大で、ほかは目を瞑るしかなかった。とにかく、私の給料のほとんどを、母は家政婦で稼いだ分のほぼすべてを返済に充てた。山間の小さな学校に転勤となり、そこで一緒に暮らし始めた伴侶にもその旨を伝え、定額は返済に充てた。娘が生まれ、家政婦の仕事を一時中断して子守に専念していた期間が後半生の母の最高のひと時であったろう。転勤して夫の実家から通うようになり、再び家政婦の仕事に戻った母は、一年半後に過労で亡くなってしまう。五人家族でにぎわっていた生家は、十年ほどの間に住人が次々と欠け、生存するのは、伯父の連れ合いが尼崎に帰る際に施設入所した伯母と私だけになった。

母が元気なうちは、休みを合わせて家に帰っていたし、娘が産まれてからも、伯母を施設から迎えて過ごすことがあった。母が亡くなり、子どもが二人、三人になっても、お盆には仏壇を開けて位牌を乗せ、正月にはお鏡を供え、親子で泊まっていた。近所の人に、「桶屋（屋号）に明かりが灯っちょうと、ほっとすうがね」と言われ、こういう日々がずっと続くと思っていた。

がらがら橋日記

宮森健次

日田①

十月の終わりに九州に行った。学生時代のクラブ活動の後輩夫婦が長崎に住んでおり、ここ数年低山ハイクに夢中と聞いていたので、一度いっしょに登ろうという話になったのだった。

去年久住山に登ったとき、九州の山容や山からの眺望が中国地方のそれとはずいぶん違うことに興味を覚えたのと、名だたる温泉が豊富にあることから、九州は何度でも訪れたいお気に入りになっている。

早朝に松江を出発し、午後には島原半島に着いた。小浜温泉に一泊して翌朝雲仙普賢岳に登り、再度小浜温泉に泊。三日目は島原の乱の遺跡である原城跡に立ち寄り、その後日田に向かって泊。四日目に小鹿田焼の窯元を巡って帰松。登山については現地の二人に任せ、あとは日田に寄りたい、ぐらいしか考えず、行ってからどうするか決めようというお気楽な旅だ。どうせするなら荷物も計画も詰め込まない旅がしたい。

日田では咸宜園を訪ねた。以前『江戸の読書会』（前田勉・平凡選書）というおもしろい本を読んだときにその名を記憶したのだが、それが九州のどこにあったかなど忘れてしまっていた。日田が咸宜園とともにある町と知って、自分のスカスカの記憶を補充するためにも旧跡を訪ねておきたいと思った。

まだ朝の九時にもなっていなかったが、敷地内に入ることができたので、別棟の二階建ての書斎や母屋を見て回った。母屋の勝手口にはスーツにネクタイの七十前後とおぼしい男性が立っていた。受付の人かと思ったが何だか様子がいかめしい。人物リサーチも兼ねて建物は復元かと話しかけてみると、

「いいえ、当時のままです。」

とだけ言い、特にこちらに目をやることもない。総じて九州の人は男女ともによくしゃべり、愛想がいい印象があるが極めてぶっきらぼうだ。状況としては係員としか思えないが、まとう空気が異様に硬質だ。

座敷の障子は閉まっていたが少し開けてみると、受付の座机が据えられていて、パンフや受付簿が置いてあった。他に人がいないので、受付簿に名前を書いて見学する方式なのだろうと思い、靴を脱いで座敷に上がった。

「ここは何時に開くと書いてありましたか。」

後ろから、難詰する口調で声をかけられた。ぎょっとして振り向くと、さっきのスーツの男性だった。何を聞かれたのかよくわからず、しどろもどろに何かしゃべると、

「私は十年ここにいますが、あなたのように勝手に上がる人を見たのは初めてです。」

口調は落ち着いているがかなりの剣幕だ。（続く）

30代フリーター　先日の朝日新聞別刷り「ｂｅ」（10月21日）の「フロントランナー」は哲学者・作家の千葉雅也を登場させ、「中間こそ根源的（ラジカル）だ」を彼の基本スタンスを示す言葉として紹介している。「中間」というと、どっちつかずとか、あいまいとか、マイナスイメージもある。

年金生活者　千葉の考えは、２項対立の脱構築を唱えるデリダの考えがもとになっていて、「中間」の重視は吉本隆明の思想とも共通する。

吉本は『心的現象論序説』で、好きとか嫌いとかという感情はどんなに重要なように見えても、最も重要なのはそのどちらでもない「中性」の感情であることを指摘している。「中性」の感情は、好きとか嫌いといった感情を対象化し、それらに距離を取ることによって生じる。そこには対象の遠隔化という人間に固有の観念作用が働いており、だからこそ最も重要なのだと吉本は説く。

好きと嫌い、善と悪、美と醜、真と偽といった、対立する２項に「中間」「中性」があるとしたら、それは好きでも嫌いでもない状態、善でも悪でもない状態、美でも醜でもない、真でも偽でもない状態ということになる。それは、２項対立が生まれる以前の状態が存在していたことを想定させる。それが「中間」「中性」のモデルとなっているとも言える。

30代　２項対立で物事をとらえるのはとても便利だし、それなしには生活も社会も成り立たないだろう。

年金　２項対立の原型は生誕にある。母と一体だった胎児はこの世界に生まれ落ちると同時に母から離れ、母と一対一の関係に入る。それが２項対立の基盤となる。

分離した母子はそれぞれ欠如を抱えた存在となる。一体性の喪失という欠如だ。それを埋め合わせたいという願望が生まれる。それぞれに欠けているのはそれぞれの相手だから、ともに相手を我が物にしようとする。それが対立を生む。

もう少し詳しく言うと、欠如を埋めるために、相手を我がものにしたいという願望とともに、相手のものになりたいという願望が生まれる。前者は対立を生み、憎しみに発展する。後者は融和に向かい、愛を生む。こうして、母と子という２項対立だけでなく、愛と憎しみという２項対立が成立する。

母子が互いに相手を自らの欠如としてその関係を結ぶように、愛は憎しみの欠如として、憎しみは愛の欠如として成立する。同様に、善は悪の欠如として、悪は善の欠如として、美は醜の、醜は美の、真は偽の、偽は真の欠如として成立する。それぞれの欠如が、一体性への復帰の願望を生むが、それはかなわないことなので、代わりに「中間」が求められる。

30代　生誕にともなう母子の一体性の喪失が両者に欠如を生じさせる、とジイさんは言うが、そんなことを理解できない乳児に愛も憎しみもないだろう。

年金　子のほうは言葉を覚えるまでその欠如を知らない。欠如とは無であり、無は否定によって認識される。その否定を可能にするのが言葉にほかならない。

人間は言葉を覚えるまでは、まだ母胎の楽園の余韻の中にいる。母と完全には分離しておらず、一対一の関係にはなっていない。すなわち吉本隆明の想定する「対幻想」はまだ形成の途上にある。

否定が言葉によって可能となるのは、言葉そのものが否定によって成り立っているからだ。言葉は、猫なら猫という対象を「ネコ」という音によって指し示す。そのとき現実の猫はネコによって代替される。それは現実の猫を無いものとして扱うこと、否定することを意味する。

現実の領域には無は存在しない。それは有だけで充たされている。言葉はその現実とは別の次元を切り開く。現実ではない世界を現出させる。それは現実を否定する世界であることによって、「有」の充実に「否」を唱え、「無」を導き出す。

この「否」、この「無」が幼児に母との一体性の喪失を意識させ、自らの中に欠如があることを教える。このとき初めて母と一対一の関係に入り、対幻想が形成される。それは人間が生涯の最初期に経験する２項対立、すなわち愛と憎しみの対立の基盤となる。

30代　千葉の言う「中間こそ根源的（ラジカル）」の「中間」とは例えばどんなことだ。

ニュース日記　898

中村　礼治

「中間」がなぜ大事か

年金　対立する２項を超える第３項を想定することができる。

彼が言っているわけではないが、国家はその典型だ。対立する人と人、集団と集団を調停あるいは裁定、すなわち脱構築する。そんな国家どうしが対立したときは、国連やＥＵ、Ｇ７といった国家間システムが第３項となり、脱構築を図る。

母と子の間の２項対立を脱構築するのは第３項としての父であり、その過程を精神分析ではエディプスコンプレックスと呼ぶ。この場合の父は生物学的な父とは限らない。彼は母子の間に社会の掟の体現者として割り込み、母子を対立から解放する。

善と悪、真と偽、美と醜といった概念の２項対立の「中間」、すなわち第３項に該当するものとしては、芸術の世界、とりわけ文学の世界を考えることができる。そこでは善悪、真偽、美醜は同等に扱われ、どちらがいいかなどは問題にならない。おのずと対立は脱構築される。